11・1住民投票と東京新聞

こちら特報部
維新 かすむ存在意義
大阪都構想 住民投票
松井市長「2度負けた」引退宣言
自身の再挑戦「ない」 吉村府知事

大阪市立中央図書館で東京新聞、とりわけ「こちら特報部」を定期的にチェックしている。写真の 11 月 3 日は住民投票と維新について詳しく伝えている。

同日「筆洗」を途中から紹介する。―こんな川柳があった。〈気張らんとまあぼちぼちいきまひょか〉。どなたの川柳かといえば、大阪出身の作家、田辺聖子さん。焦らず、着実に一歩一歩という人が多いのか。物事の判断に慎重で大きな変化を好まぬ大阪人も少し見えてくる。▼投票結果は荒療治より〈まあぼちぼちにいきまひょか〉という判断なのだろう。大阪市を廃止し 4 特別区に再編する「大阪都構想」の賛否を問う住民投票。反対が賛成を上回り、否決された▼2015 年の住民投票に続く 2 度目のノーではさすがに都構想も店じまいか。その僅差は大阪市民が悩み抜いた末の結果に違いない▼都構想で府と市の二重行政による弊害や財政の無駄を取り除く。その理想は分かるが、コストはむしろ増えないか。やってみなければ分からぬ都構想への期待より「ほんまでっか」の疑問が上回ったのかもしれぬ▼大阪を二分した闘いのしこりが心配である。決着はついた。大阪人にはシャクだろうが、ぜひとも江戸っ子の「はらわたはなし」でいきまひょか。

4 日の斎藤美奈子「本音のコラム　維新の手法」も、なかなか鋭い。

いわゆる大阪都構想の是非を問う住民投票が反対多数で否決されな。前回（2015 年）の投票用紙の文言は「大阪市における特別区の設置についての投票」。今回は「大阪市を廃止し特別区を設置することについての投票」。「大阪市を廃止」と明記した選管の判断は事態を正確に知らせる意味でグッジョブ。大阪市民の良識のある選択もブラボー！だった。

にしても、なぜ今こんな投票で市民をふりまわさなければならなかったのか。大阪市民の立場で考えると、はた迷惑としかいいようがない。

橋下徹氏が立ち上げた大阪維新の会は、仮想敵をつくり、なにかと対立を煽って注目を集める手法で選挙に勝ってきた。医療・福祉から教育・文化まで、コストカットの標的にされた住民サービス事業は数知れない。文楽や交響楽団の補助金カットのほか、大阪国際平和センター（ピースおおさか）や大阪人権博物館（リバティおおさか）については展示内容に行政が口を出すという悪しき前例さえつくった。

コロナ対策を後まわしにしてまで決行した住民投票。市民を敵と味方に分けて敵を徹底攻撃する手法はトランプ大統領のそれとも重なる。都構想で敗れた吉村洋文知事と松井一郎市長は大阪万博やカジノ（IR）誘致で景気の浮揚策を図るらしい。派手なイベントで人を釣る手法もトランプそっくり。

（2020 年 11 月 19 日）